

# 在日外国人児童生徒等の支援への思い　　足立　英逸

それは二〇一五年一月、「寒」の時期だった。取引先の在神戸市外国会社の親御の小学児童の学習ランゲージ支援の要請を受け、県・市教委に照会したのが、この支援活動の始まりである。最も寒い「大寒」を経てようやく立春を迎える頃である。

それから、主に在日ソビエト連邦の児童・生徒・親御から、在日旧ソ連ビジネスパートナーへと、ロシア語・英語を媒介とするランゲージ学習・生活支援等を引き受けることになって八年が経過した。

七十一年の馬齢を重ねる一方で、小学低学年の児童から、特化目的の日本語指導のビジネスパーソンまで大体、学校学習支援・翻訳・通訳・日本語教育の四つに分かつ活動の中で、小さな仏さんのような児童・生徒には、特段その関り方を問い続けている。

今では、ざっと神戸市の九区とその周辺、芦屋市・西宮市・宝塚市・加東市・姫路市など二十八市、並びに十二町の兵庫県内の主に小学校・中学校・高等学校・中等教育学校在籍の外国人児童生徒等の支援を行っている。兵庫県は、都道府県別の在留外国人の構成比では、東京を筆頭に千葉県につぐ七番目に位置しており、年々外国人児童生徒等の数も大幅に増加している。さらには日本語指導が必要な児童生徒の背景の多様化に伴う支援も増加

傾向にある。

また外国にルーツをもつ生徒には、進学も就職もしていない中学生の率が全中学生の八倍以上、高校生の中退率が六倍以上、進学も就職もしていない高校生等の率は二倍以上、高等学校等を卒業した後の就職者における非正規就職率は十倍以上で、特段の配慮が必要になっている。

彼らの教育に関する権利と保障が認められる中での、学級生活の把握から支援・指導を計画・実施するうえで基盤となる実態・ニーズ、つまり来日年齢からこれまでの生活・学習経験・発達状況までの文化間移動や家庭環境・宗教並びに将来の進学・進路・職業選択・家族の予定など、過去から現在、未来の連続性の時間軸の中で捉えることが必要だ。

さらに学校文化を踏まえた指導・支援や、異文化理解・多文化共生の視点に基づいた指導・支援、そして日本語指導に対する認識として、彼らの立場で悩み・苦しみ・心情・言葉の意味の理解に努め、言葉を引き出し心を込めて聞き・受容し、自己決定・自己選択を促す援助などの基本姿勢が望まれる。

彼らの教育には様々な人々が、それぞれの立場で関わっている。私の母語支援と日本語指導の側面的役割からも、児童生徒への教

育活動、校内の連携・共通理解、家庭との連携・共通理解、そして外部機関・地域との連携・共通理解と大きく四つに分けることができる。

日本語指導については、学校で学ぶ国文法、つまり学校文法とは異なる日本語学習の必要性を考慮し、その際には、それぞれの児童生徒の生活や学習の状況、適応状況、学習への姿勢や態度の把握、個々に適した指導を行うことの大切さを念頭に置き、発達段階（年齢）についても十分に理解する必要がある。彼らの多くは、家庭内では母国の言葉、一歩外にできれば日本語で生活している。二つの言語で生活をしている彼らにとっての日本語は「外国語」ではなく、生活のための第二言語なのだ。彼らが「日本語」を学ぶことは、「日本で暮らすこと」を学ぶことでもある。

「日常会話は出来ても、授業などの学習に参加できない子供が多い。日常会話の力、生活言語能力と、学習で求められる力、学習言語能力は違う」という声をよく耳にする。前者は対一の場面での日常的で具体的な会話をする口頭能力で、後者は、教科等の学習場面で求められる情報を入手・処理し、それを分析・考察した結果を伝えるような思考を支える言語の力である。

「生活言語能力」については、ある程度は、普段の生活の中で自然に身につくが、教師による支援も必要となる。一方、「学習言語能力」については、生活の中で身につくことはあまり期待できない。日本語指導担当教師が中心となった計画的な支援が必要

になる。成人の学習者と異なり、児童生徒の場合は、日本語学習に目的意識を持っていない場合が多く、学習内容が定着しないことがよくある。児童生徒の生活にとっては、学習している表現や文法規則には必要性が感じられないのかもしれない。同じ学習項目に留まって暗記を強制したりせず、次の学習に進み、新たな内容と関連付けて学ばせるか、しばらくしてから再び取り上げてみるといった工夫が求められる。言語学習のプロセスは、スパイラルに進むと言われている。児童生徒の興味関心や必要性を考慮し、日本語でコミュニケーションすることの楽しさや、意味が感じられる学習活動の中で、繰り返し指導することが重要と考える。

**Повторение – мать учения.** 「反復は学習の母。習うより慣れよ。」

児童生徒の「言葉の力」をトータルで捉えるには、日本語の力の一部である文法力や語彙力、文字表記の力、読解力、短い文を書く力など以外に、授業中の観察、発表やスピーチ、作文などの成果物の評価も、他の側面の日本語の力として把握する必要がある。

一言で「日本語指導」といっても、内容は様々で、日本語を使って行動する力を付けることの目的から始まって、学校への適応や教科学習に参加するための発音・文字・文型の基礎、小学高学年から中学生には有効と言われている「聞く」「話す」「読む」「書く」の日本語の技能、そして私が最も期待する「日本語学習から在籍学級での教科学習の橋渡しとしての考え方に基づいた「日本

語を教科学習の場面から切り離さずに学習する場面をつくる」  
「具体物や直接体験により学びを支える」といった日本語と教科  
の統合学習がある。

さらには、児童生徒の母語がしつかりしている場合は、母語で  
進めることが有効と言われているが、母語ばかりに頼ってしまわ  
ない指導配慮も必要となる。母語による支援は、児童生徒にとつ  
ては、気持ちを伝えられるので安心できる、日本語だけでは理解  
できない内容を効率よく理解できるといった利点がある。ただし、  
小学校の低学年では、母語の力自体が十分育っていない場合には、  
母語で説明したからといって、教科内容が円滑に進むとは限らな  
い。児童生徒の母語の発達状況に応じた対応・支援が重要となる。

また母語による支援で陥りやすい問題もある。例えば、児童  
生徒が母語に依存し過ぎて日本語を聞いて理解しようという気  
持ちなれない、母語と日本語を適当に切り替えながら使用して  
いるので、どちらの言語においても体系的に力を付けられない、  
などだ。母語を支援のために有効に利用するには、どのような場  
面に母語で、どのような場面に日本語で対応するのかについての  
ルールを決めておく必要があるが、実際には、時間的制約の中で  
困難を極める。バイリンガル教育やスリーリンガル教育において  
は、指導者がルールなしに言語を切り替えることは、二つの言語  
の発達という視点からはプラスに作用しないと考えられている  
が……。

児童生徒が母語や母文化をアイデンティティ形成の自身の一  
部として肯定的に捉え、日本社会においても自己実現できるよう  
に、日本語と母語の両方の力を育むことが期待される。

第一言語の母語の発達状況は、言語能力を捉える上では非常に  
重要な要素である。母語と第二言語（日本語）第三言語（英語な  
ど）の関係については、深層面の認知的学問的な側面を支える能  
力（意味や機能）の部分は共有していると言われている。一方、  
それぞれの言語の発音・文字・語彙・文法、おしゃべりの力など  
は、表層面の能力で、その言語に触れ、学習しなければ獲得でき  
ない力と言われている。

日本語を学ぶ児童生徒の場合、来日する年齢によって母語の発  
達の度合いが異なるが、小学校に入学する時期の児童であれば、  
日常会話の力は身に付いている。しかし「今、目の前にある」具  
体的なこと以外については、まだうまく伝えられない。学校入学  
後、体系的、意図的な教育を受け、文章に触れ、読み書きの学習  
を通して、徐々に深層面の力がはぐくまれていく。目前にないこ  
とについて述べたり、考えたりするために言語を使用する力や、  
抽象化・一般化して物事を表現する力である。そうして培った認  
知的学問的な言語の能力や、言葉の意味や機能についての体系化  
された知識は、第二言語を学ぶ時にも活性化される。

小学校の低学年程度の児童の言語習得の強みは、音の聞き取り  
や発音、場面と一緒に丸ごと表現を覚えられることである。ただ

し、日本語の語彙の意味を母語で伝えても、母語でその語彙の概念や意味を知らなければ理解できない。一方、小学校高学年以上の児童生徒の強みは、母語で培った考える力、分析する力、言葉の概念に関する知識を利用して第二言語を学べる。この点からも、年齢と母語の力の違いが日本語学習に影響することが分かる。

深層面の力は、小学校の高学年ぐらいまでに発達すると言われている。低学年で来日した児童の場合は、来日後も母語の習得を意図的に促進させるか、日本語の教育をしっかりと行うかしないと、どちらの言語も思考する力が未発達という状態になることがある。言語の問題だけではなく、教科学習にも社会生活にも負の影響がでる。これまで少なからず見てきたとおりである。

一方、多文化共生の時代に言葉の教え手、いわば日本語の支援者として私たちはどのように関わっていくべきなのだろうか。まず、言葉の支援が意味することの言葉というのは、それを使えば色々なことができる。これはもちろん母語の日本語を使ってもそうである。事実を伝えることもできる。誰かを叱る、褒めることもできる。あまり良いことではないけれども、欺瞞することもできる。言葉というのは、包装紙のようなもので包装紙の中身としてのメッセージ、これはいくらでも変えることができるわけだ。そういうことはあまり良い話ではないが、日本語を学んだ学習者は、例えば困っている日本人に「どうしたんですか」と話しかけて助けることもできれば、もしかしたら脅すこともできるわけだ。

どちらも日本語を勉強したがゆえに可能なことである。こういうことを考えるとき、改めてこの時代に私たちが教えるべき日本語の指導というものは、一体日本語の指導なのか支援なのか、それともよく言われる日本語教育なのか、という、この専門用語タームの洗い出しから、この問題を考えてみたいと思う。指導というのは、例えば水泳の指導のように、あるスキルなり、技術なりを教えるということである。あまり面白い授業をするわけではないプロの先生だとこれになるかもしれない。「今日はこの文型を教えます」「この単語・語彙を教えます」と淡々と進めます、学習者がやりました、終わり、というような指導からはそういう単に技術を教えるだけのもの、というのを感じる。

一方で、支援というのは何かというと、これは二つ意味が違ってくると思う。一つは、何かというと、支援をすべき相手は何か困ったことがある。つまり、日本で暮らしていく上で、言葉ができないと困る。日本の学校で学ぶ上で、日本語ができないと困ってしまう。そういう困っている人を手助けするという意味合いが一つ。もう一つは、言葉の支援だけではなくて、やはり、生活なり、実際の勉強なりができるような言葉プラスX、言葉プラスα、こういう形の助けが入ってこそ日本語支援ではないかと思う。

そして、日本語の指導にも日本語の支援にもそれなりの意味はあるが、やはり私たちが言葉の教え手としてやるべきことは日本語教育ではないかと思う。では、支援を超えた日本語教育とは何

だろうか。プロのような技術を持っていなくても、外国人に日本語を教える、それも一生懸命教える、誠心誠意教える、分からなかったら一緒に考える、時には学習者が言ってくれたことで心から喜ぶ。そういうことを通して、学習者のこういう日本人と知り合えて嬉しい。私もこういう日本人になりたいと思って言葉を学ぶことが、日本を知り、人生を知り、人生の視野を広げて幸せになったと感じられるようなことをする、そうするとそれは日本語教育になるのではないだろうか。つまり立派な先生が生徒を導いていく、という、主に学校でなされているようなことが小さな教室、会議室の一隅、そういうところでもできれば、その時言葉を習った人はその日本語を使って、あざむくだますというようなこととはしなくなる。嘘もつかなくなる。そういうものではないかと思う。そのためには自身の努力が必要だが、やはり同時に言葉を教える、私たちも日本語を教えることで、日本人の言語風土や日本人的な発想、こういうことに気が付くことができる。日本語を教えるということは日本語というもう血肉になった当たり前のようなものを改めてお皿とか板の上に置いてじっと見てみるような試みである。そうすると日本語を教えていくうちに、いまままで、思いもしなかった日本語への疑問というのが出てくる。例えば、合格発表を見て「やったー、嬉しい！」というのを言うわけ、これを例えば英語にすると「I'm happy.」みたいなことになる。

しかし、なぜ私たちは嬉しい時に「嬉しい」、寂しい時に「寂しいな」というのは言うけど、「私は」というのは言わないのだろうか。「私は嬉しい」とか、「私は寂しい」とは言わない。これを省略というふうに説明してしまえば、それは一つのレットル針だ。なぜ省略するのかという、そこになってくると、まだわからないことが多い。自他ともに軽視していた英語が国際語の地位にのぼるだろうと、十八世紀半ば頃に考える人はまれであったことを思えば、ここに二十一、二十二世紀に日本語が世界の通商語になる可能性がないわけでもないという空想を抱くことが出来るであろうか。

話題をもとに戻そう。それから異文化のコミュニケーションの中で、私たち日本人というのは、例えばどなたかからご馳走になって、当然、お店を出た時に「ご馳走様でした」とか、「美味しかったです」「ありがとうございます」と言う。翌日その方と会った場合、どうするか。やっぱ「昨日はありがとうございます」「良かったです」ぐらい、ちよつと言わないとなんか気持ちの収まりつかないという感じがする。これを外国の学習者に言うと、みんな、「え？ いや、言いません」という人がほとんどである。じゃあ、一晩で恩は忘れるんかいな？……と思うんだが、そういったような枚挙にいとまがないほど日本的に当たり前と思っている習慣がそうではないことが分かったりする。

そういう習慣を無視せず、言葉と社会の切っても切り離せない

関係、つまり言語即人間社会と考え、生活上、言語上の発見をするとき、自分にとってもいい成長になる。

言葉を使ったコミュニケーションは単に言葉が通じればいいというだけではない。

違った発想、ものの考え方そのものの考え方や発想がどういふうに言葉に落とし込まれるか、そういうことも考えて指導していく。さらには、異文化に適應する過程とか文化の変容だ。児童生徒に限らず、一回落ち込んでまた上がるとか、帰国したらまた逆のカルチャーショックでその後また上がるとか、様々な過程がある。

こういう違う文化の人と接するんだ、ということを知るためには異文化トレーニングという試みもある。

さて、成長についてももう少し申し上げると、マンツーマンとか、支援者として日本語を教える過程で、月単位・年単位をかけてその中でも自分の得意なこと、プロにはならなくても、専門というのを見つけてるのはいいことだと思っている。専門の見つけ方にも実にいろいろあり、例えば子どもの勉強を中心に見るという、学習者、別の子どもに教える、というのが一つ。ビジネス経験を生かす場合は、ビジネスパーソンに、例えば敬語とか社内外でのいろいろなることを教える。主婦なら主婦同士で買物の情報とか地域の情報を中心にやる。こういう考え方もあるでしょう。

それから母語別、人数別というのももちろんある。自身が学習

者の母語が出来るのであれば、母語を話す人の語用とかついているのは、こちらがその文法とか単語・語彙がわかっていると、やはり上手に教えることもできる。こちらの人数別というのは、例えばマン・ツー・マンで教える場合、どうすればうまくいくのかつていう、例えば会話が途切れた場合どうしようかとか、ちよつと関係が悪くなった場合どんなふうにすればいいかとか、ニーズをどこまで生かすべきか、言語学、言語教育学の方では、不得要領なので、細かい課題には意外と踏み込まず、立場上、様々な質問について自分で深めて考えていくのもいいのではないだろうか。さらに、ビジネスパーソンの話からで、特化目的の日本語を教えるという、特化目的というのは何かというと、例えば医学の日本語、病気の時とか、海外取引・法律などの日本語とか、様々な仕事で、化学薬品の会社であるとか、商事会社であるとか、DIYのお店の日本語とか、様々なものが特化目的となって自身のキャリアとか経験を使って教えることもできる。

さらには、超短期とか完結型の短いもの、三時間の日本語指導みたいなものを考えていても十分に面白いのではないか。いずれもプロでは十分にすくい取るができない、趣味として考えても非常に面白い分野ではないだろうか。

それから学びに向けてということ、教え手としてピリフとついうものが形成されていく。これはこのように教えたい。教え手としてこうありたいという一つの信念だ。信念にあまり凝り固ま

ってはいけないが、ないというのも考えものでしょう。この多文化共生の時代に外国人と交わさなければいけないものの中で、自分にとって何が出来たのか、その何をどうするかといったような、基本的な指針を作ることが大事なのではないかと思う。

また、自分の経験に今度は教え手としてのレファレンスが形成される。ピリフは信念、レファレンスというのは、自分が参考にする時の知識の友達のようなものをいう。日本語教育で言えば、文系の辞典とか、発音の辞典、文法の案内書、教科書、さまざまなものがある。経験を重ねながら、これらレファレンスを揃えることによって、これだけあれば、それなりの授業準備ができる、だいたいのは答えられる、と。

まだまだボランティアに近いほんの初級の入り口に立ってる状態だが、知識を支える友達というのはプロの方と、もうそんなに遜色はないように思う。

今後いつまでポテンシャルの維持継続できるか予測できないが、向上の証には、さらなる収集をして、勉強をしてみても、初級・中級それ以降の日本語学習者への経験回数を増やしながら、まだもう少し勉強したいなと思ったら、外での多流試合とか、外の勉強会、ちよつと二の足を踏んでしまいそうなプロの先生が集まって話をするような会のSNS、学会がやっているような研究会に、プロの人がどういうことを考えているのか、こういう勉強があるのか、こういうのがもっと必要なのか、この人はこんなことをや

っているのか、という知識を得なくとも刺激を得ることだけでも、あわよくば、教え方指導法のさらなる実践的な知識だけは身につけたいと、そう思っている。そういうふうにはやってみても、もしかしても、いつかは完全なプロを目指すということは、今は思ってもよらない。日本語教育推進法で言われているような公認日本語教師資格取得に向けての準備、試験を通る、実習は実践の場身につけ、学理は自分で解決といった、私に生きる哲学の優先順位からは、この一連過程が視野に入ることはない、ということである。

この活動の一端には、あくまでボランティアとして、日本語の教え方を、何よりも分かりやすさを中心に、ある程度の専門用語を習得しつつ、より良い教え手を目指して、単語・語彙・文法から「話す」「聞く」「読む」「書く」の実習とその技能指導法を学ぼうとしてきた。プロとの違いというのは、専門用語とその細かさぐらいなもので、特にその教え方とか、実際に教える上での対処法といったことについては、もしかしたらプロを目指す人の知識びっしりのものよりはさらに実践的でいい活動内容をしているのではないのか、と勝手にそんな思いをしている。

多文化の時代に教え手としてどう関わるか、ここが前の問題もあり、これから伸びていくためにはどうすればいいか、将来の問題もあり、ちよつと未熟化というこの一区切りに、これまでどんなことを学んだかをもう一度振り返り復習しながら、これからこ

ういう教え方を指すんだということをおアマチュアとして、さらには時にプロとして考え直す、そういう機会にたく、否応なく「在日外国人児童生徒等への思い」と題し、蕪雑な文章をお目につけた。

最後に一つだけ、心がけていることがある。それは授業であれ、実は予習であれ、復習であれ、それは「楽しくやろう、面白くやろう」ということだ。私がこれまで県内のおよそ六十校の学校教育に関わったに過ぎないが、どのどんな場所でも、いつの時代でも、楽しい授業、面白い授業というのは、学習者にプロベースでもアマチュアベースでも、こんなにも歓迎されるんだ、という当たり前のことに気がついたからだ。

日本では、笑い声が絶えない教室というと、時にふざけているみたいに思われる人がいるが、日本語の授業は全然そんなことはない。誰だって面白い授業、楽しい授業とそうじゃない授業があった場合は、面白い授業、楽しい授業のほうがいいに決まっている。どんなものを目指すのでも、自身が何か面白いことを言うとか、そういうことを考えなくてもいい。自分がワクワクした気持ちで、さあ、日本語を教えるぞ、学習者に学んでもらおう、楽しくやろうという気持ちを持っている限り、その授業はいつも明るく輝いている。

仲良く楽しく、相互が幸せになれるような教育という点が大事なのではないか、そういう意味ではできないこと、知らないこと、

予期せぬことがあっても、それもまた楽しいことの一つと考えて大らかに日本語教育を楽しんでいきたい。

外国人の日本語学習者が日本語を学ぶように、外からの視線で日本語を教える視点が身につくよう、日本語の音声・表記・語彙、外国語としての日本語文法、日本語表現のゆたかさなどを、煩を厭わず外国語を見るように日本語を観察し分析することを、いつも学習者に教わっている。

#### Язык неистощим в соединении слов.

「言語、それは語と語の結びつきが無尽蔵のもの」(A・S・プーシキン)

